

## 映画『Love Letter』の図書室

入不二 基義 IRIFUJI Motoyoshi

映画『Love Letter』（岩井俊二監督・中山美穂主演）では、図書室は重要な場所である。同姓同名（藤井樹）の男子と女子—柏原崇と酒井美紀が演じる—が、中学に入って同じクラスになり、周囲から冷やかされつつ、カップルで図書委員にさせられてしまう。

少年・藤井樹は、図書委員の仕事をほとんどしない。誰も借りていない本を借りて、まっさらな図書カードに「藤井樹」という名前を書き込んでいく遊び（いたずら）に興じている。「藤井樹ストレートフラッシュ」と言って、5枚の図書カードをトランプのように広げて見せる。少女・藤井樹は、「ばっかじゃない」と呆れて、冷ややかな視線を送る。

これは、忘れられていた思い出だった。大人になった藤井樹（女）は、ある事をきっかけに、少しずつ思い出していく。渡辺博子という女性が、山で遭難して亡くなった恋人（青年・藤井樹）宛に書いた「届かないはずのラブレター」が、藤井樹（女）へ「誤って」届いてしまう。渡辺博子と藤井樹（女）の不思議な文通が始まり、渡辺博子の求めに応じて語りつつ、藤井樹（女）は自分の中学時代を再発見していく。同姓同名の少年のことを思い出していく藤井樹と、亡くなった恋人の少年時代を初めて知る渡辺博子。二人は、双子のようにそっくりで、中山美穂が一人で二役を演じている。

ところで、少年が図書カードに書いていた「藤井樹」は、ほんとうに彼自身の名前だったのだろうか。藤井樹（女）の名前だったのではないか。さらに、少女が少年に向ける視線や苛立ちや微笑みには、淡い恋心が透けて見えないだろうか。

大人になった藤井樹（女）は、母校を訪ねたときに、あの図書室で後輩の少女たちと対面する。少女たちは、図書カードの「藤井樹」さがしゲームについて語ってくれる（すでに87枚見つけたという）。少女たちは、その名前を書いたのが男子だったと聞いて、もう「恋」の匂いを嗅ぎつけている。もちろん藤井樹（女）は、「それは私の名前ではなくて……」と言って、否定しようとするけれども。

中学三年の卒業間近だった一月。少女・藤井樹は、お父さんが亡くなって、学校を休んでいる。そこへ少年・藤井樹が訪ねてきて、借りていた本が返せなくなったからと言って、一冊の本『失われた時を求めて』を彼女に預ける。少女・藤井樹は、一週間遅れで登校して、少年・藤井樹が急に転校したことを初めて知る。預かった本を図書室の書架に戻そうとして、いったん手が止まり、図書カードを確認する。やはり「藤井樹」と書かれていた。この卒業間際の出来事が、少年・藤井樹との最後の思い出であると、渡辺博子への手紙に書く。

しかし、ほんとうは「最後」ではなかった。十年の時を経て、そして図書室を経由して、失われていた過去が戻ってくる。「藤井樹さがしゲーム」を続けていた後輩の少女たちは、『失われた時を求めて』の図書カードの、さらにその裏に「証拠」を見つけて、先輩の藤井樹に届けにやって来る。図書カードの裏にあったのは……。藤井樹は、まるで少女に戻

ったかのように恥じらいながら、その本を優しく抱える。これはもう、渡辺博子には伝えられない、彼女だけの思い出である。図書室は、届かないはずのものが届く所、失われていた過去と出会う場だったのである。

(教育人間科学部教授 哲学)